

2-1

調査の基本設計

ベネッセ教育総研主任研究員 田中 勇作

はじめに

第1章でも触れられたように、私たち「総合学力研究会」(事務局；ベネッセ教育総研)では、前回の「学力向上のための基本調査2003」を通して検証した「子どもの総合学力」を如何にして育てるかという新たなテーマのもと、昨年度に引き続き大阪教育大学助教授田中博之先生ならびに大阪市立大学大学院助教授木原俊行先生に監修をいただき、「学力向上のための基本調査2004」の設計・実施・分析を進めてきた。

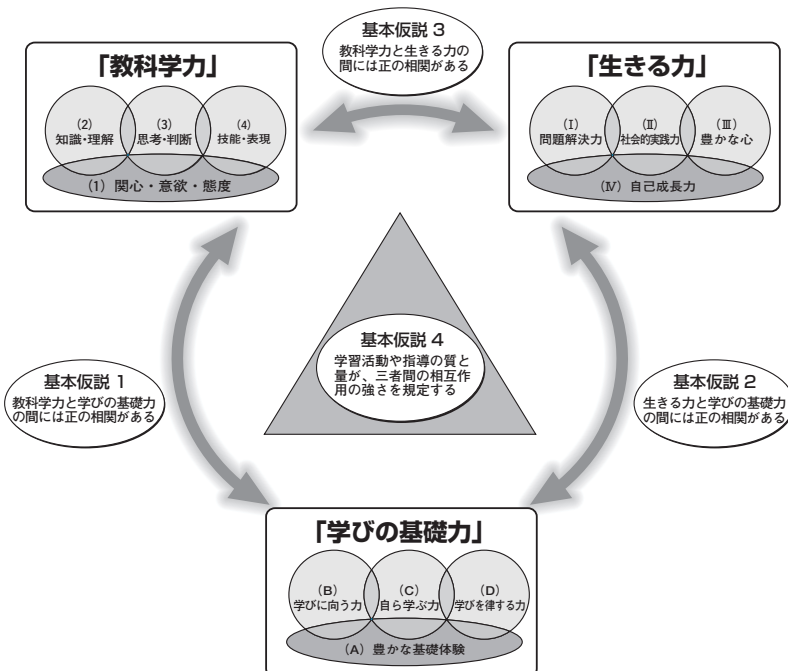
今回の調査研究に際しては、これまでの教育方法的視点に加え、学校経営学を専門としておられる大阪教育大学講師の大野裕己先生にも新たに監修に加わっていただき学校経営や教育行政的な視点に立ち、「教師の指導力」「家庭の教育力」そして「学校の経営力」といった三者の教育力からなる「総合教育力モデル」を構想することができた。

本節では、第1章で田中博之先生からご報告いただいた「総合教育力の向上に関わる基本コンセプトや6つのキーワード」を踏まえる形で、今回の「学力向上のための基本調査2004」がどのように企画・設計されたのかについて説明する。

1 「学力向上に向けてのトータルデザインの構築」

図表 2-1-1

「学力向上のための基本調査2003」で検証した「総合学力モデル」



さて、「学力向上のための基本調査2003」では、図表2-1-1に示す「総合学力モデル」を構想し、「教科学力」「学びの基礎力」「生きる力」という3つの学力は相互に関連し合っており、それらを総合的に育成していくことが大切であるということによって、「偏った学力観のもとに全国共通とも言える方法論」で学力向上に取り組もうとしていた一部の教育現場に対して一石を投じることができたのではないかと考えている。

その他にも、「学校と家庭の連携の大切さ」とともに「学校・家庭の本来的教育機能の在り方」など、これまでも先生方が

経験的に理解し、実践してこられたことについて、客観的なデータに基づき検証することによって、精力的に「学力向上」に取り組んでおられる多くの教育委員会・学校、そして先生方からの賛同をいただくことができた。

そして、「子どもと学校の実態把握に基づく学校改革のプランづくり」ということで提唱した、この「総合学力モデル」に則った「総合学力調査」を組み込んだ「学力向上への取り組みのPDCAサイクル」の考え方は、全国の多くの自治体でも採り入れられ、着実に成果へとつながっていることは、私たち「総合学力研究会」としてこの上ない喜びである。

さて、こうした「学力向上のための基本調査 2003」に基づいた提言を一言でまとめると、「学力向上に向けてのトータルデザインの構築」ということになり、下記のようなトータルな視点に立って、これまでの学力向上の取り組みを見直し、学校改革につながる総合的な取り組みへと再構築していくことを調査報告書等での発信や教育フォーラムや講演会等を通して紹介してきた。

学力向上に向けてのトータルデザイン構築の視点について

- ① 「学力の定義」をトータルに捉える。 （「総合学力」の概念の導入）
- ② 「学力向上の手法」をトータルに捉える。 （複合的でバランスの取れた指導）
- ③ 「学力向上の取り組み主体」をトータルに捉える。 （学校・家庭・地域・社会の連携）
- ④ 「学力向上施策の過程」をトータルに捉える。 （R-PDCAサイクルの導入）
- ⑤ 「学力向上施策の構造」をトータルに捉える。 （学校・家庭・教育行政の役割分担）

もう少し詳しく言うと、①に関しては、「学力」を「知識・理解」に代表される「目に見える教科の学力」だけで捉えるのではなく、教科学力を支える「学びの基礎力」や教科学力を統合し実践に活かす「生きる力」をも含めて多面的に捉えることによって、子ども一人ひとりの状況を「総合学力プロフィール」としてよりの確に把握し、各人において向上・育成すべき「学力領域」はどこにあるのかを明らかにするといった「学力向上における基本スタンス」の再確認を促している。

そして、②では、このように「学力」を多面的・総合的に捉えるならば、その多様な「学力」を向上させる手法や道筋も自ずと多様なものとなり、ブーム的に全国を席卷するようなある一つの方法論のみで解決するという単純なものでは決してありえないという立場に立ち、「総合学力プロフィール」の診断に応じた「処方」の在り方を多面的・総合的な視点から考え、実践に移していくことを提案している。

また、③では、「学力向上」を教師個人に課せられたテーマとして矮小化して捉えるのではなく、教師間の連携や協働といった学校経営上のテーマとして、そして、家庭や地域・社会との「共育」や教育行政上のより上位概念の課題として統合的に捉え、各自が明確な当事者意識と役割認識を持ち、具体的な連携と協働を遂行していくところに「着実な成果」が積み上がっていくことを事例を通して紹介してきた。

次の④に関しては、「学力向上」の取り組みの中に、「総合学力調査」の実施により明らかとなる子どもの実態を踏まえ（R; Research）、課題の焦点化を行い、その解決に向けてのアクションプランを立て（P; Plan）、計画に沿って実践し（D; Do）、その成果を評価・総括し（C; Check）、改善・蓄積につなげる（A; Action）という「R-PDCA」のマネジメント・サイクルを明確に位置づけ、遂行することによって、その成果は、単に子どもの教科学力の向上という次元にとどまらず、教師・保護者、そして学校そのものの成長に資する「学校改革」へとつながっていくという認識に立って、その普及に努めている。

最後の⑤については、上記①～③を踏まえる形で、「学びの基礎力」を核に、「教科学力」、「生きる力」を同心円的に位置づけた「総合学力」を、「学校」「家庭・地域」「教育行政」という三者のそれぞれの機能と連携によって育成していく「学力向上施策の体系モデル」を構築し、子どもの総合学力向上に向けての具体的な施策の俯瞰図と

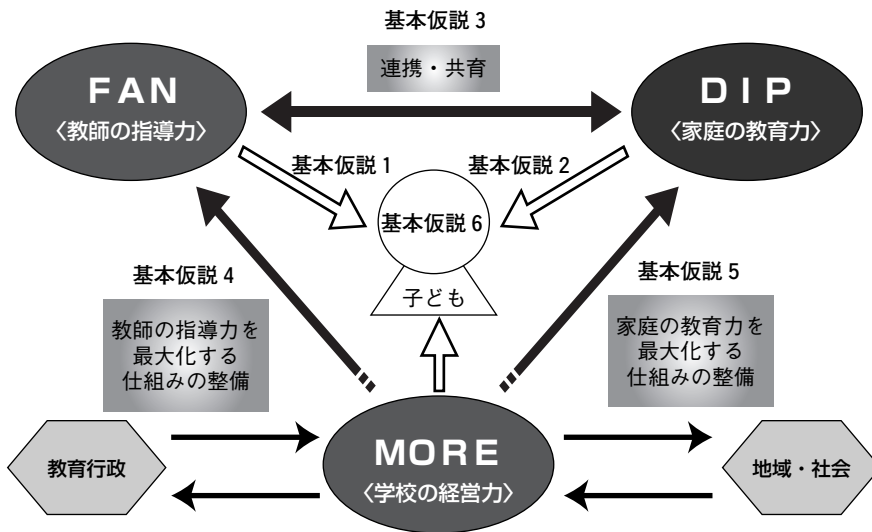
して紹介してきた。なお、「学力向上施策の体系モデル」の詳細については、第5章1節を参照いただきたい。

そして、「総合学力研究会」では、このような「学力向上に向けてのトータルデザインの構築」に関する提言を、客観的な裏づけを持つより具体的な施策として提案して行くことを次なるテーマとして定め、次に示す「学力向上のための基本調査 2004」の企画へとつなげていった。

2 「総合教育力モデル」の構造

図表 2-1-2 は、先に見た「学力向上に向けてのトータルデザイン構築の視点」の③を「教師の指導力」、「家庭の教育力」、「学校の経営力」という3つの教育力の観点から捉え、三者の総合力が、子どもの総合学力の育成にどのように関わっているかをモデル的に示したものである。

図表 2-1-2 「総合教育力モデル」の構造と基本仮説



- ① 基本仮説 1 : 「教師の指導力」は複数の機能から構成され、子どもの「総合学力」の育成に複合的な影響を及ぼしている。(第3章1節で分析・考察を展開)
- ② 基本仮説 2 : 「家庭の教育力」は複数の機能から構成され、子どもの「総合学力」の育成に複合的な影響を及ぼしている。(第3章2節で分析・考察を展開)
- ③ 基本仮説 3 : 「教師の指導力」、「家庭の教育力」は双方の連携によって、子どもの「総合学力」の育成により強く働く。(第3章3節で分析・考察を展開)
- ④ 基本仮説 4 : 「教師の指導力」は「学校の経営力」によって、一層高められる。(第3章4節で分析・考察を展開)
- ⑤ 基本仮説 5 : 「家庭の教育力」は「学校の経営力」によって、一層高められる。(第3章5節で分析・考察を展開)
- ⑥ 基本仮説 6 : 子どもの「総合学力」は「教師の指導力」「家庭の教育力」「学校の経営力」の三者の相互連携によってより向上する。(第3章6節で分析・考察を展開)

つまり、「教科学力」「学びの基礎力」「生きる力」からなる「子どもの総合学力」を確かな学力としてバランスよく育成していくためには、「教師の指導力」のみではなく、「家庭の教育力」との連携・協働、および両者の力を支え、最大限に発揮させる役割を担う「学校の経営力」の三者を有機的に関連させる「学力向上のトータルデザイン」の構築が不可欠であるという我々の基本認識および基本仮説を図式化したものである。

そして、今回の「基本調査 2004」では、このモデルに沿う形で後述の各種調査バッテリーが構築され、ここに示した6つの基本仮説の検証を可能とする各教育力モデルの構築と調査項目の設計を行っている。

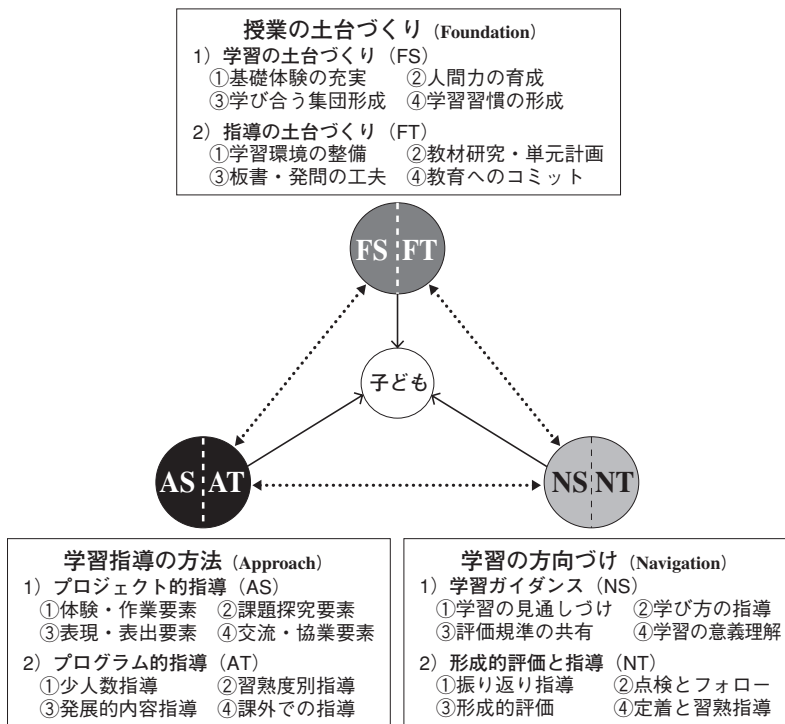
3 「総合教育力」を構成する3つのモデル

次に、前述の「総合教育力モデル」を構成する「教師の指導力」「家庭の教育力」「学校の経営力」の3つの基本要素について、それぞれの構成項目(機能)と構造モデルの概要を示す。

1 「教師の指導力」に関するモデル(FANモデル)

図表2-1-3は、「教師の指導力」を「授業の土台づくり(Foundation)」、「学習指導の方法(Approach)」、「学習の方向付け(Navigation)」の3領域(機能)によって構成されるものであると操作的に定義し、その3領域が相互に関連し合うことで、子どもの総合学力の育成に資するというを示すモデルである。なお、各領域の頭文字を取って「FANモデル」と命名した。(なお、“fan”は“fun(楽しい)”ではなく、子どもの学力をかき立てるといふ教師の重要な機能とかけた命名となっている。)

図表2-1-3 「教師の指導力」の構造に関するFANモデル

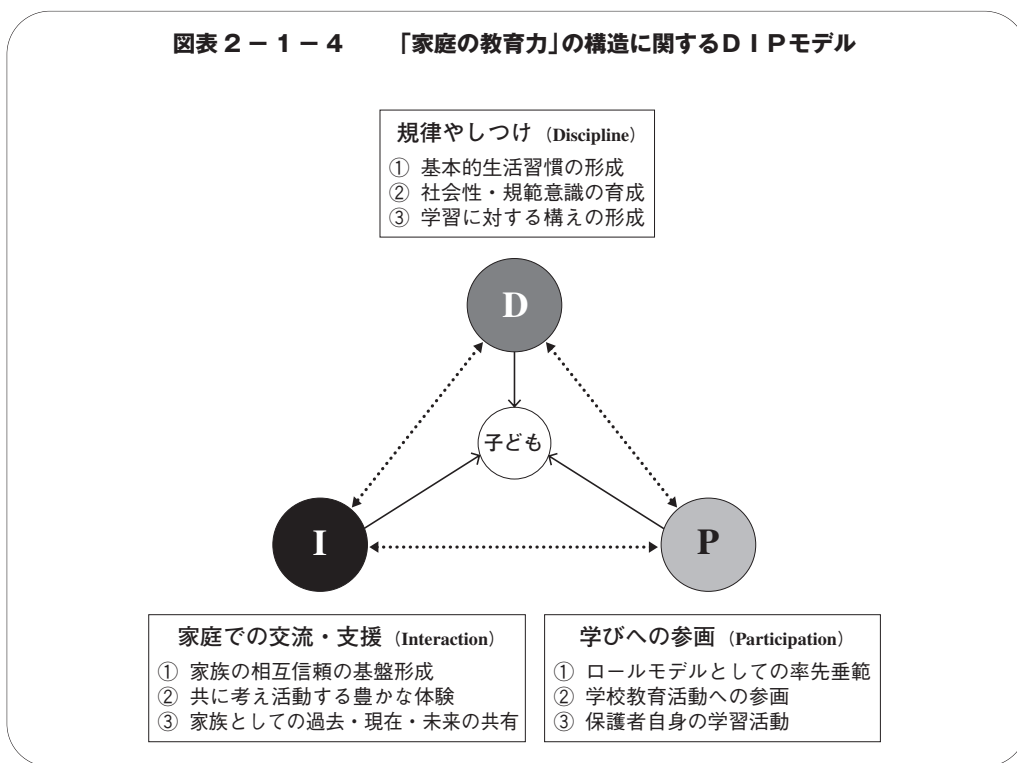


更に、上記の各領域を「学習者の認知活動を支援する観点；S (Support)」と「学習者への直接的な指導の観点；T (Training)」の2つの観点から分割し、FS (学習の土台づくり) / FT (指導の土台づくり)、AS (プロジェクト的指導) / AT (プログラムの指導)、およびNS (学習ガイダンス) / NT (形成的評価と指導)の計6観点から、教師の指導力を把握するモデルとして設定している。

なお、本モデルに沿って教師の指導力のスタイルを同定し、そのスタイルによる子どもの総合学力育成への影響の違いを分析できるように、各観点ごとに上図に示した①～④等の調査項目を設定し、それに基づく質問項目を「教師調査」として作成した。(実際の質問項目については、本章第3節を参照)

2 「家庭の教育力」に関するモデル (D I Pモデル)

次に示す図表2-1-4では、「家庭の教育力」を「規律やしつけ (Discipline)」「家庭での交流・支援 (Interaction)」「保護者自身の学びへの参画 (Participation)」の3領域から構成されるものとして操作的に定義し、それらの三者が相互に関連し合いながら、子どもの総合的な学力を育成していくことを示している。FANモデル同様、各領域の頭文字を取って「D I Pモデル」と命名している。



なお、「規律やしつけ；D」に関する領域は、どちらかというと保護者からの一方的な働きかけとなる傾向が強い一方、「家庭での交流・支援；I」は、家族内の交流や支え合いといった相互作用を特徴としている。また、「保護者自身の学びへの参画；P」は学校の教育活動への参加・協力状況も含めたものとして考えている。

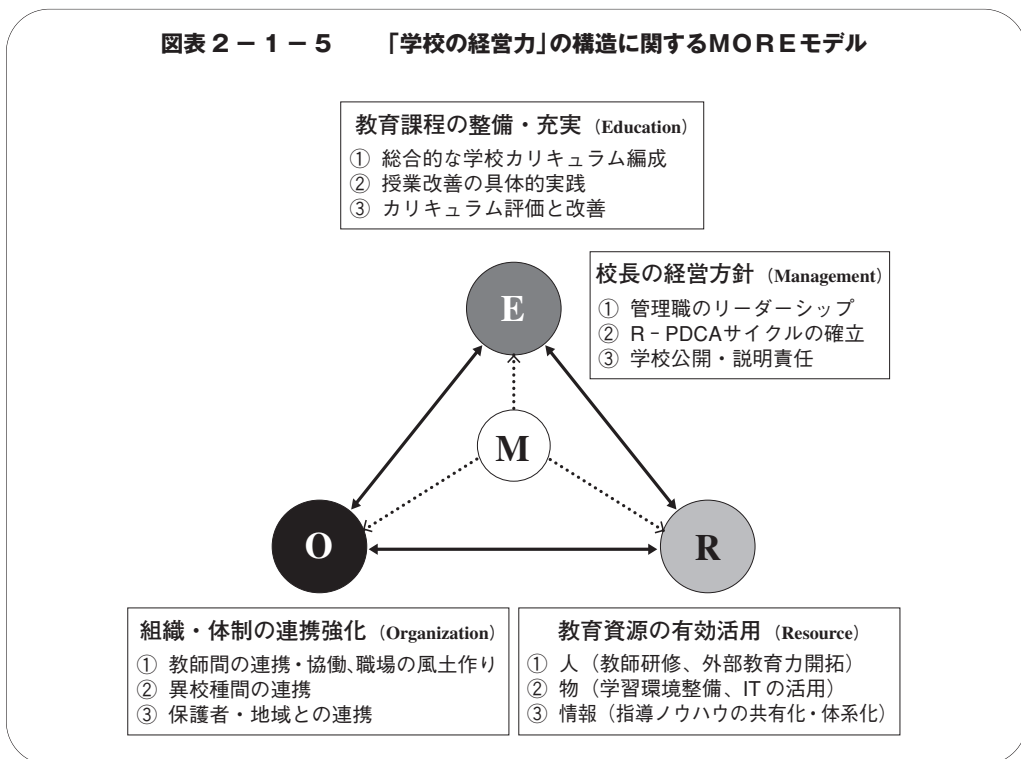
また、FANモデルと同様、本モデルに沿って家庭の教育力のスタイルを同定し、そのスタイルによる子どもの総合学力育成への影響の違いを分析できるように、各領域ごとに上図に示した①～③等の調査項目を設定し、それに基づく質問項目を「保護者調査」として作成した。(実際の質問項目については、本章第4節を参照)

3 「学校の経営力」に関するモデル (MOREモデル)

図表2-1-5では、「学校の経営力」を「校長の経営方針 (Management)」「組織・体制の連携強化 (Organization)」「教育資源の有効活用 (Resource)」および「教育課程の整備・充実 (Education)」の4領域から構成されるものと

して操作的に定義し、各領域の頭文字を取って「MOREモデル」と命名した。(なお、前述の「総合教育力モデル」に示したように、「学校の経営力」そのものは子どもの総合学力に直接的に影響を及ぼすというよりも、むしろ「教師の指導力」や「家庭の教育力」の向上を通して、子どもの総合学力を「より高める“more”」という意味を込めた命名となっている)

なお、前述の「FANモデル」「DIPモデル」では、中心に「子ども」が位置し、各領域からの働きかけが「子ども」に影響を及ぼす構造モデルを示していたが、この「MOREモデル」では、中心に「校長の経営方針；M」を位置づけ、学校経営の基本要素とされる「組織・体制」「教育資源」「教育課程」の各領域に対して、校長(管理職)がどのような働きかけを行っているかという観点に立ち、「学校の経営力」の状況を探るモデルとして設定している点に留意いただきたい。



また、先の2つのモデルと同様、本モデルに沿って学校の経営力のスタイルを同定し、そのスタイルによる教師の指導力や家庭の教育力の向上、および子どもの総合学力育成への影響の違いを分析できるように、各領域ごとに上図に示した①～③等の調査項目を設定し、それに基づく質問項目を「校長調査」として作成した。(実際の質問項目については、本章第5節を参照)

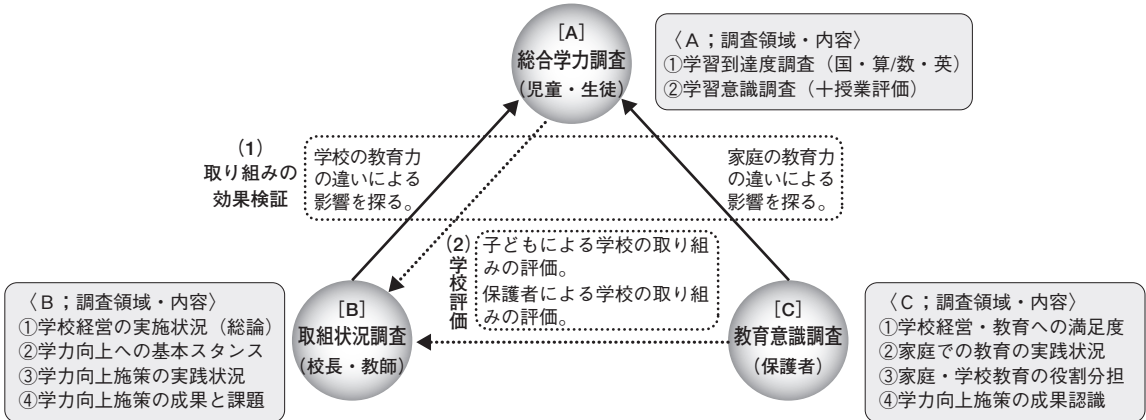
4 「学力向上のための基本調査 2004」のフレームワーク

以上、今回の「基本調査 2004」における我々の問題意識をはじめ、本調査研究の基本コンセプトとなる「総合教育力モデル」ならびに「基本仮説」等について、その概要を紹介してきたが、ここで、それらを踏まえて今回の調査のフレームワーク(全体構造)を**図表 2-1-6**に示す。

紙面の関係で、詳細については割愛するが、先の「総合教育力モデル(基本仮説)」および「各教育力の構造モデル」と併せて、今回の調査の全体像を俯瞰していただく上での参考にしていただければ幸いである。

図表 2-1-6

「学力向上のための基本調査 2004」のフレームワーク



5 調査概要

1. 調査名称；「学力向上のための基本調査 2004」
2. 調査のねらい；〔A〕児童・生徒対象の「総合学力調査」、〔B〕校長・教師対象の「学力向上への取り組み状況調査」、および、〔C〕保護者対象の「教育意識調査」を通して、昨年度の「基本調査 2003」で明らかにした児童・生徒の「総合学力 (学習到達度、学びの基礎力、生きる力)」の相互関係を再検証するとともに、児童・生徒の「総合学力」を育成する上で有効となる学校や家庭の教育活動の在り方や相互の連携について考察し、「学力向上のためのトータルデザインの構築」に向けての資料を提供する。
3. 調査対象；
 - ①子ども調査 小学校第4、6学年の児童 (36校、約5,600名)
中学校第3学年の生徒 (29校、約3,300名)
 - ②教師調査 小学校教諭 約600名、中学校教諭 約580名
小学校教務主任 約120名、中学校教務主任 約120名
小学校校長 約110名、中学校校長 約110名
 - ③保護者調査 小学生保護者 約3,800名 中学生保護者 約2,500名

※なお、上記の②には、教師調査のみに協力いただいた「学力向上フロンティア校」(小中計約160校)が含まれる。
4. 調査時期；2004年5月10日～6月4日 (各校は左記期間内の任意の日程で実施)
5. 調査内容；

対象	調査名称		内容
児童・生徒	学習到達度調査	①国語学力調査	・調査対象学年が前年度末までに学習した教科内容に対する学習の到達状況を、「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」の各観点から測る設問で構成。出題形式は選択式と記述式を併用。(所要時間；小学生45分、中学生50分) ※なお、各教科とも「関心・意欲・態度」はアンケート形式で測定。
		②算数/数学学力調査	
		③英語学力調査 (中3生のみ)	
	学習意識調査	④学習についてのアンケート	
教師	⑤指導の状況に関するアンケート (教師対象)		・「学力向上に向けての基本スタンス」、「学力向上に関する学校としての取り組み状況」、「日々の指導における学力向上の工夫」、「学力向上施策の成果と課題認識」等について、それぞれの立場から4件法で自己評価を行う。
	⑥指導の状況に関するアンケート (教務・研究主任対象)		
	⑦指導の状況に関するアンケート (校長対象)		
保護者	⑧子どもの教育についてのアンケート		・「学校教育への要望・満足度」、「家庭での働きかけの状況」、「家庭・学校教育の役割分担」、「学校の学力向上施策の成果」等についての認識を4件法で問う意識調査。

6. 調査方法；東北・関東・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州の小学校36校、中学校29校に対して、上記5の内容を学校通しによる自記式調査(テスト)にて実施。なお、全国の学力向上フロンティア校に対して、教師調査を郵送にて依頼。

7. 調査主体；「総合学力研究会」

監修：大阪教育大学助教授 田中博之
 大阪市立大学大学院助教授 木原俊行
 大阪教育大学講師 大野裕己

メンバー：栗田稔生(大阪教育大学附属平野小学校教諭) 重松昭生(守口市立八雲小学校教諭)
 馬場博志(大阪教育大学附属平野小学校教諭)
 井寄芳春(大阪教育大学附属平野中学校教諭) 野中拓夫(大阪教育大学附属平野中学校教諭)
 田辺久信(大阪府教育センター指導主事)

事務局：ベネッセ教育総研

注記

●本報告書における分析上の指標やレベル化基準等の考え方について

1)各種スコア	総合学力 関連	①教科総合 スコア	●教科・学年によってバラつきのある「学習到達度調査」の各教科通過率を同一尺度で比較できるように、小学生は国語・算数2教科、中学生は国語・数学・英語3教科の合計スコアを偏差値換算し、「教科総合スコア」として定義。
		②学びの基礎力 総合スコア	●「学習意識調査」における「学びの基礎力」に関する約40の項目に対する4件法による子どもの自己評価をもとに、最高が100、最低が0となるように数値化した上で、偏差値換算したものを「学びの基礎力総合スコア」として定義。
		③生きる力 総合スコア	●上記②の「学びの基礎力総合スコア」に準じる形で、「生きる力」に関する約20の項目に対する子どもの自己評価を数値化した上で、偏差値換算したものを「生きる力総合スコア」として定義。
	総合 教育力 関連	④FAN 総合スコア	●「指導の状況に関するアンケート(教師調査)」における「教師の指導力」に関する86項目のうち、子どもの教科総合スコアと正の相関が強い24項目を抽出し、「とてもあてはまる；4」「まああてはまる；3」「あまりあてはまらない；2」「まったくあてはまらない；1」として数値化した上で、合計スコアを偏差値換算したものを「FAN総合スコア」として定義。(詳細は第3章1節参照)
		⑤DIP 総合スコア	●上記④の「FAN総合スコア」に準じる形で、「子どもの教育についてのアンケート(保護者調査)」における「家庭の教育力」に関する43項目から抽出した15項目に対する保護者の自己評価を数値化した上で、偏差値換算したものを「DIP総合スコア」として定義。(詳細は第3章2節を参照)
		⑥MORE 総合スコア	●上記④の「FAN総合スコア」に準じる形で、「指導の状況に関するアンケート(校長調査)」における「学校の経営力」に関する74項目から抽出した16項目に対する校長の自己評価を数値化した上で、偏差値換算したものを「MORE総合スコア」として定義。(詳細は第3章4節を参照)
2)各種スコアの レベル設定	総合学力 関連	①各種学力の 5層分類	●児童・生徒の教科学力、学びの基礎力、生きる力に関する各総合スコアをもとに、上位から7%、24%、38%、24%、7%の割合に順ずる形で、L5からL1の5段階を設定。
	総合教育力 関連	②各種教育力の 3層分類	●教師、校長、保護者の各種教育力に関わる領域別スコアのレベルは、各領域における総合スコアを偏差値換算し、60以上を「上位群(約15%)」、40～59を「中位群(約70%)」、40未満を「下位群(約15%)」として3群に設定。
3)クロス集計単位	①子どもの総合学力と 教師の指導力のクロス		●小学校；前年度の学級担任の意識調査スコアとそのクラスの子ども教科学力および学習意識の平均スコアをクロス(子どもの集計単位は前年度クラスとする) ●中学校；前年度第2学年を担当した教師群の意識調査スコア平均と現中3生全体の教科学力および学習意識の平均スコアをクロス(子どもの集計単位は前年度学年全体とする)
	②子どもの総合学力と 学校の経営力のクロス		●小学校；校長の意識調査スコアとその学校の小4・小6生全体の教科学力および学習意識の平均スコアをクロス(子どもの集計単位は学校全体とする) ●中学校；校長の意識調査スコアとその学校の中3生全体の教科学力および学習意識の平均スコア(子どもの集計単位は中3生全体とする)
	③子どもの総合学力と 家庭の教育力のクロス		●小学校；保護者の意識調査スコアとその子どもの教科学力および学習意識の平均スコア(集計単位；個人) ●中学校；小学校に準ずる。